協力会元理事の日置順正さんに書いて頂きました。
タンネウシ３月号に掲載しました、大正時代の農産物輸送についての続きです

２.冬の大仕事、昔のビート運搬

大正14年の暮、斜里から網走までの貨物輸送のみちがひらかれた。それに併せて帯広の日甜工場へビートを送るべく、斜里農業基礎確立のためその年ビートの試作を依頼されたのが、朱円の農事組合長羽田野耕三を中心とした四人である。以来長い間、町内農家で耕作されたビートは馬橇によって農家の耕作畑から会社の各駅受入土場までの直送であった。ビートを入れるため馬橇の上に二枚区切りの厚い底板をのせ、僅か底巾の広い大きな板の箱を上げたものだった。

深雪にならぬうちに搬出したいので、斜里までどうにか馬橇の利くようになれば少々の無理は覚悟の上で始まった。朱円からの道は雪の量によって・三号道路－斜線　・以久科北区一号大排水盛土道　・西区の旧根室道路を海岸に向け行き、南側砂丘上で左に折れ雑林に拒まれる手前で下に降りるの３ルートであったが、雪さえあれば・が一番楽だった。・ルートは他のルートが全く駄目の仕方ない時で、長い坂の砂丘を無事下まで降りるのには人、馬共に大難所であった。高い砂丘の上でたくさんの馬追いが見つめる中、一台ずつの試験台。人も馬橇も半ば滑って行くような状態だから中には下の本道に乗り損ねて横転。ビートを一帯に撒き散らすのもあった。受入場所は今の菱雄石油の玄関西にあった。次の難所は現在の駅東側の公設駐車場は計量済みのビート置場の大山で毎日可成りの貨車輸送が行われているが、山は段々長く高くなっていく。何が何でもビートの山を貨車近くの高いところまで引き上げねばならない。随分と山も広いので何筋かの上ってゆく橇型も出来ていて、大方の馬はそれを苦労しながら上ってゆく。ここでも矢張り弱い馬もいて、あちこちで怒鳴る声で戦場のようだった。

そのような中で最高約１屯を積んで荒道を引き上げてゆく強い馬が朱円に二頭いた。うち一頭はわが家の愛馬「鹿毛」で、おとなしくて正直で力持ちで家族のようだった。

順番で橇型道を引き上げてゆくが前の馬が難儀していると鹿毛は心得たもので適当な所で先ず一服！！馬方の「それ行け！！」の大一声で横の荒道に向かって挑む。上って行く行く新道故脚もぬかる。前脚を曲げて頑張る、腹をビートにこすり着ける位にして一息に上り詰める。途中で上ったら駄目なことは馬も心得ている。上り切った鹿毛のそばに寄って顔に抱きつき、「鹿毛御苦労だったなー」と何度も鼻を撫でてやると馬も嬉しそうに応えてくれる。人馬一体だ。朱円の人は大方、一日二往復したので時間帯によっては三号道路上は今の車の数より多かった。往きは荷を引き、帰りは走り兎に角馬には辛いことだった。　（日置　順正）

最近の昆虫調査でわかり始めたこと（２）

前回は知床岬の植生変化と昆虫についての話題でしたが、今回は春の虫についていくつか考えたいと思います。春、雪が融けるやいなや多くの虫たちが我々の前に姿を現します。その姿を見て春の訪れを感じる人も多いと思います。

春先だけにしか姿を現さないものをスプリング・エフェメラル「春の女神」と言いますが、蝶マニアの方は本州ではギフチョウ、北海道ではヒメギフチョウだとすぐに思うはずです。このヒメギフチョウですが、斜里町内での分布はおおよそ調べられています。主に山麓部付近にいますが、最近、山麓部で山林伐採や土地改良、土砂採取などの開発行為が増えています。それに伴って、食草であるオクエゾサイシンが生える環境が狭められ、今では神社や林道沿いに細々と残るだけとなりました。もともと、オクエゾサイシンはセイヨウタンポポのような分布拡大能力はないので、一度絶滅するとそれと共に生きてきたヒメギフチョウ自体も絶滅するという構図になっています。

ここ数年、町内でのヒメギフチョウ生息数を調べてきているのですが、特に、来運、富士地区での生息数が極端に減少してきているように思われます。気候などが要因となることもありますが、昨年は両地区とも数頭しか確認できませんでした。今年も注意深く観察していこうと考えていますが、その結果については７月号で報告します。（松田）

・ヒメギフチョウ
発生時期：５月上旬から下旬、場所によっては６月でも見られる
発生回数：年１回　　越冬態：蛹
特徴：アゲハチョウを小さくしたような姿。黄色と黒の縞模様。桜やエゾノリュウキンカ（ヤチブキ）などの花で吸蜜する姿を見かける。

暖かくなりました。植物たちも雪解けの間から、ぐんぐん成長していく姿を見かけます。これからの植物観察が楽しみです。５月の講座スミレマラソンで様々なスミレを見に行きませんか？　（秋山）

発行　斜里町立知床博物館協力会　2003.4.15
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49　斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/